

南相馬の報徳仕法に関わる人物

◆富田高慶（とみた こうけい）

二宮尊徳の一番弟子となり、尊徳の代理として中村藩の報徳仕法実施を指導し、さらには尊徳の娘・文（ふみ）と結婚するなど、尊徳から絶大な信頼を得ていました。

尊徳の教えを広めるために「報徳記」や「報徳論」を残し、後に尊徳の妻子が行方郡石神村（現 南相馬市原町区石神）に移り住むと、二宮家の世話をするために自分も近くに寄り住み、亡くなるまで二宮家と報徳仕法に対し力を尽くしました。

◆斎藤高行（さいとう たかゆき）

高慶と同じく二宮尊徳の弟子となり、高慶とともに藩の報徳仕法の指導にあたりました。

また、報徳仕法の理論・方法と指導者の心得を記した「報徳外記」、尊徳の言った言葉をつづり報徳の教えをあらわした「二宮先生語録」を残しています。

◆荒至重（あら むねしげ）

幼いころから頭がよく努力家だった荒至重は、藩の算術を1年足らずで習得し、江戸で算術・測量術を学び、その後二宮尊徳の弟子となりました。

高慶らとともに藩に戻ると、習得した算術・測量術を用いて多くの用水路やため池を作り、仕法を成功に導きました。また、学んだ知識や技術を伝え、人材を育成するために「量地三略」、「算法町見術」を著しています。



富田 高慶



斎藤 高行



荒 至重

東日本大震災の影響と復興について

南相馬市では、東日本大震災により、沿岸部を中心に大きな被害があり、多くの市民の尊い生命が失われるとともに、報徳仕法に関係する旧跡等が流失損壊しました。さらに、東京電力福島第一原子力発電所事故が発生し、市民の避難、事業所の閉鎖や撤退を余儀なくされ、穏やかな生活が奪われました。

国内外の皆様へ支えられながら復興への取り組みを続け、平成28年7月12日には、東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内の避難指示区域が解除となり、JR常磐線原ノ町～小高駅間の列車運行も5年4か月ぶりに再開されました。今後は公共交通の確保、病院の診療体制の充実、商業施設の再開等のインフラ整備、防犯パトロールの強化を進めるなど、市民が安心して生活を送れるようなまちづくりを推進しております。

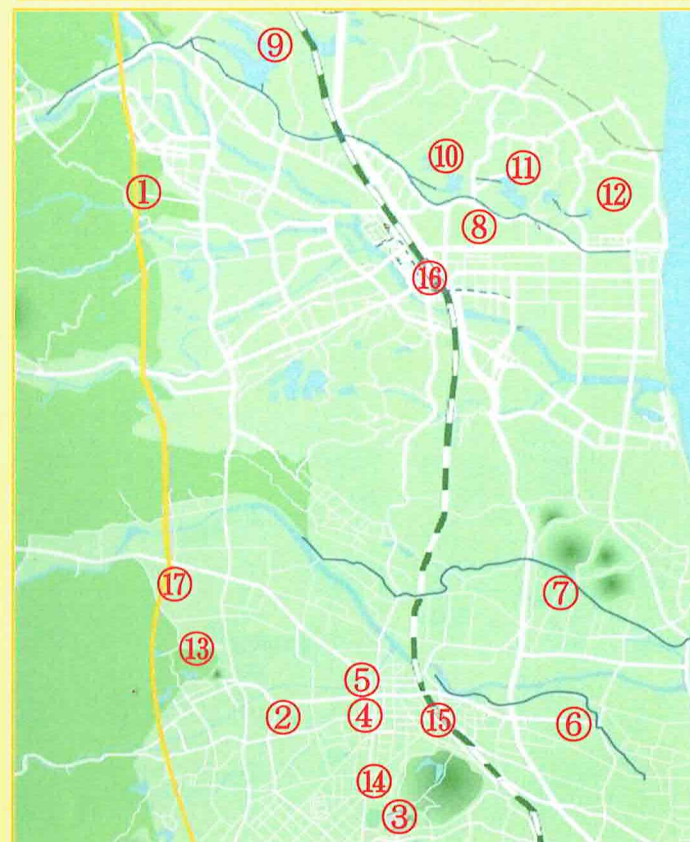
この地において二宮尊徳の弟子である富田高慶らが、天明の飢饉以降、多くの荒廃した農村を救済するために実践した「至誠」「勤労」「分度」「推譲」の精神による報徳仕法は、震災からの復旧・復興に貴重なヒントを与え、復興に活かす、ひとづくり・まちづくりへとつながるものです。

報徳仕法ゆかりの市内めぐり

第22回全国報徳サミット南相馬市大会



報徳仕法ゆかりの市内めぐりマップ



- ①セデッテかしま・南相馬鹿島スマートIC
- ②二宮家住宅跡、二宮尊徳・富田高慶の墓
- ③南相馬市博物館
- ④南相馬市民文化会館「ゆめはっと」
- ⑤南相馬市役所
- ⑥～⑧用水路 ※⑥萱浜用水路 ⑦上江用水路 ⑧七千石用水路
- ⑨～⑬ため池 ※⑨唐神ため池 ⑩石宮ため池 ⑪藤金沢ため池 ⑫玉貫ため池 ⑬内城ため池・中山ため池
- ⑭相馬野馬追祭場地
- ⑮JR原ノ町駅
- ⑯JR鹿島駅
- ⑰南相馬IC

※この報徳仕法ゆかりの市内めぐりマップは、平成28年10月開催の報徳サミットにあわせて作成したものです。スペースの関係上、市内めぐりで訪れる鹿島区と原町区を中心に、関連施設や報徳仕法に関する史跡等の一部のみを掲載しています。なお、ここに掲載している用水路とため池に関しては、すべて報徳仕法の取組みとして新築・改修されたものです。

問い合わせ

第22回全国報徳サミット南相馬市大会実行委員会
〒975-8686 福島県南相馬市原町区本町二丁目27番地
南相馬市市民生活部文化スポーツ課（H28.10）
TEL 0244-24-5249 FAX 0244-23-3013

南相馬市について

南相馬市は、平成18年1月に1市2町が合併して誕生しました。東部には太平洋が広がり、西部には阿武隈高地が連なる豊かな自然に囲まれ、旧中村藩の始祖と伝えられる平将門が野馬を追う軍事訓練を行ったことが発祥とされる、「相馬野馬追」の祭場地として知られています。

また、この地は二宮尊徳の一番弟子の富田高慶によって、尊徳のおしえである「至誠（しせい）」「勤労（きんろう）」「分度（ぶんど）」「推譲（すいじょう）」に基づく報徳仕法が伝えられており、報徳仕法にまつわる史跡が数多く残された報徳がいまもまちとなっています。

奥州中村藩の報徳仕法について

◆天明の飢饉と奥州中村藩

奥州中村藩では天明3～4年（1783～84年）に発生した天明の飢饉以降、冷害や洪水によってたびたび凶作となり、田畑は荒れ、餓死者や領内から逃げ出す者が続出し、人口が3分の1までに減少してしまいました。

厳しい倹約を行うなどして耐えましたが、その後も冷害がおり、藩の財政はさらに悪化し、領内は荒れていきました。

◆富田高慶と二宮尊徳

藩士の富田高慶は、荒れ果てた領内を立て直すため、藩命により二宮尊徳のもとに入門し、報徳仕法を学び、それを手伝ううちに一番弟子となりました。

中村藩で報徳仕法の実施が始まると、高慶は尊徳の代理として中村藩の報徳仕法実施を指導し、斎藤高行や荒至重らの多くの人と協力しながら、荒廃した村々の救済についても尽力し、その結果領内の多数村々を立て直すことができました。

◆報徳仕法の取り組み

荒れた農村を立て直すため、倹約や貯蓄だけでなく、農民の働く意欲を高めるしくみを作るなど、様々な取り組みが行われました。

- ・長雨や冷害に強いヒエを作るなどして食べ物を確保し、災害や凶作に備えました。
- ・村人の投票によってもっともよく働いた者を選び、表彰して農具などの褒美を与え、働き者が評価されるしくみを作りました。
- ・他の村から移り住んで来た人に新しい家や生活用品を与え、小さな子供のいる家にはお金や米を与えるなどして生活を助けました。
- ・田畑への水を確保するために用水路やため池などをつくったり、直したりしました。
- ・農作業の合間や夜に縄をない、縄を売ったお金の一部を報徳金として積み立てました。この報徳金は村人への褒美や家の修理などに使われました。

セデッテかしま



関東から東北の太平洋側を通る高速道路である常磐自動車道で、福島県の区間内では唯一の南相馬鹿島サービスエリアにある観光施設です。

内部では、一千有余年の歴史を持つといわれる伝統の祭り「相馬野馬追」の紹介や生産者の顔が見える商品、この地域ならではの商品の販売を行っており、福島県沿岸地域の魅力を発信しています。

南相馬市は、東日本大震災で大きな被害を受けましたが、報徳の精神に基づく忍耐と努力、そして多くの方の支援によって復興へ向かって進んできました。

平成27年(2015年)4月25日にオープンしたこの施設は、復興の努力が一つの形となったものであり、これまでお世話になった市外の方をおもてなし、感謝の気持ちを伝える意味でも重要な施設となっています。

※「セデッテ」とは、相馬地方の方言で「連れて行って」という意味で、「また行きたい」施設になって欲しいという思いが込められています。

ピックアップ「萱浜(かいばま)用水路」



◆報徳仕法の中の水利事業

報徳仕法の大きな事業の一つに、ため池や用水路の修理や新築といった水利事業がありました。

南相馬市原町区の萱浜地区は海辺が近く、塩分を含んだ水がたまりやすいことが関係し、田畑に使える水は少なく、いつも水不足に悩んでいました。

◆用水路の概要

全長約4 km、トンネル部分はおよそ810 m、新田川の水をトンネルを通して海辺の萱浜まで水を導く水路です。工事は人力で岩を削って掘り進め、また、完成後の管理も水路をふさぐ流木を水路に入って取り除く必要があったため、大変な重労働でした。

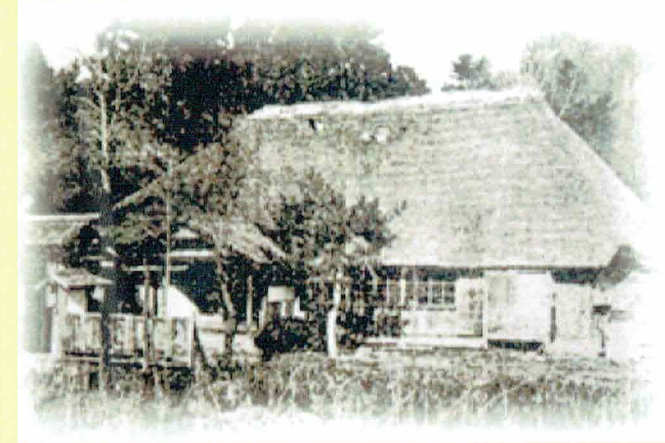
◆完成後の影響

水不足が解消されると、作物が安定して育てられるようになりました。また、荒地が開墾されることで田畑も増え、作物の収穫が増加しました。

昭和60年(1985年)、福島県の整備事業によって水路網が拡大され、現在の姿となりました。

※萱浜用水路は震災によって記念碑や用水路の一部が損傷しましたが、現在も流域の水田を潤しています。

二宮家住宅跡(現石神生涯学習センター) 二宮尊徳・富田高慶の墓地



◆尊徳の妻子の移住

慶応4年(1868年)尊徳の子尊行とその家族は、戊辰戦争の混乱から逃れるために江戸から中村藩領内に移り住みました。

その後、尊徳の孫尊親が北海道に移住するまでの約30年間ここに住み、各地の開拓事業を支援するなど、様々な活動を行いました。

◆二宮尊親と「興復社」

二宮尊親は富田高慶らとともに、報徳仕法の教えを広め、各地の開拓などを支援するために、興復社を組織して活動しました。

後に尊親が社長になると、北海道十勝に相馬地方の人々をはじめ多くの移民を送り開墾を進めました。

◆二宮尊徳の墓

住宅跡の東側には、尊徳の百年忌を記念して昭和30年(1955年)に日光市の報徳二宮神社にある墓を模して作られた二宮尊徳の墓があり、尊徳ゆかりの品が埋葬されています。

◆富田高慶、尊徳妻子の墓

墓地内には富田高慶の墓の他、尊徳の妻歌子、子尊行、尊行の妻餃子、孫尊親の妻モト子の墓があります。

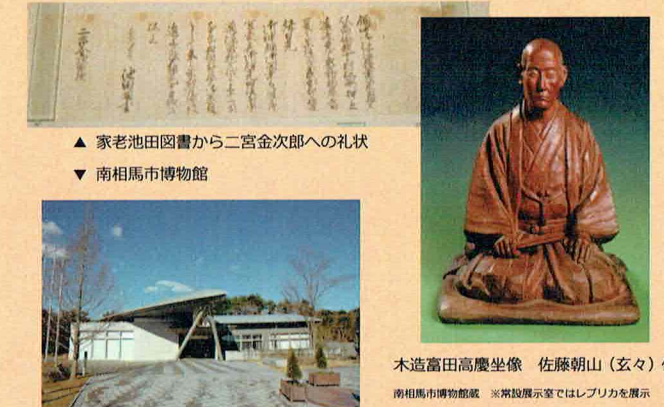
南相馬市博物館



南相馬市博物館は県営東ヶ丘公園の中にあり、豊かな自然に囲まれています。

南相馬の歴史・自然・民俗に関する展示や国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」について紹介し解説しています。

また、報徳サミットに合わせて特別展を実施しており、当地方の天明の飢饉以降の荒廃の状況から報徳仕法により復興を遂げた様子や、浄土真宗門徒たちの移民政策など、江戸時代末期の奥州中村藩の状況について紹介し、その復興のありかたについて解説しています。



▲ 家老池田図書から二宮金次郎への礼状
▼ 南相馬市博物館

木造富田高慶坐像 佐藤朝山(玄々)作
南相馬市博物館蔵 ※常設展示室ではレプリカを展示